ヘ 13
3250
5

皇井

門 へ13
3250
5

昭和十一年
一月二十日

河内文庫

四鳳鶴為後鶴亀之人

同録

一 [illegible]

[illegible]入宰[illegible]

神[illegible]の[illegible]之[illegible]

河内文庫

一 [illegible]

一 [illegible]

元亨
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

四島[illegible]後[illegible]入

[illegible]

[illegible]入[illegible]

神[illegible]の法[illegible]事

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さて滝川は心中を承しまれども心
みちて大勢のちらとよびよ御中
迎にまいりて福井太乃読れと
御せけるとじ号し御存し心中読れを
引合せんとてかくもかしもちらぢの目
ありしがてていてくれんと福井へ
指ちしきしく参りしよしは福井町へ
あへもふせし号所を参りて

胴のまぎとしく振れとまりてを
かしを当ふしき おちらけのばあへ
大きに悦びたてもれど気をひらし
二度目さん福井蛇町柳原に住
りよ面紙屋へ今まそとよみ気しき
ハ蓋し御ぐりまして今うみぬかい又
りるりも誰あつて今までぬとむすびせし
まどの要情と主宰してわかへ了所乃

剥今をとりつくし自由の流れを泳し
金子を請ればかりあらしと驕に任
此よりまし居の代をり来りしまへく
生ゆへなく栄花を極め御心の儘や
ふかりける物を召し御悔みし跡へ
二の海ゆ之たり家居へ入りしゆゑば新
たに勤めて身をまかせゆへにまかれて見と
てかへりまし郷ものども驚かれみて

自然と福禄の徳を身にそなへしが
悪しりもしても家居を手前とちり付
いそぢその身の栄てありし者の跡を付
てん遊りともいし二心の御身に栄へ
福へあ居しをゆうりと男子とどび
四方に手前とさゆへて財宝にもつかう
およに御こと栄花の全子孫へ
後の世まで栄えるへ流れるへいかる

ばかりはうぶごしなりしじせん内くだり
り福井の町にいたりて
深見れとりつゝ雲州と湖へさし
百乃吾妻屋へ立寄りて雲州様をたづ
御とば百姓ともつれて立帰り
我等にまたりけのものがてゝ来る
小松れ吾が浜新へ来りて住へ行く
さればこの人をかへしと返

内心さへ薬をりて吾妻屋へ忍び入
あらたまりし日のうちにて河立て
浮世へゆでゝ候へ吾妻屋乃しらそ
大ゆきの中へ引のうとし
しでゝ古き色を染めてむかうしはらす
吾が浮世にありつのの日水責とりつて
内新は涙を味と喜れ様すあもがれ
又室りしころりしがいつ心に一人と

かしこくも独仙の有かたき仏具をえて
同村なる者のかりまくらし庭へ
こゝろざしある人は同じくあつまりて
道具をあづけ置かへりぬ
けるゆへこゝに金は村の者を集めて
つゞけして御らう捕手と仰せける
おもては金は村ある御てに事代が伺
へかきもへいまやしと論けるところ

捕手の役人つかはされ古名
がらく御込もおほく捕への
其日にて吟味ありて咎めの下り
納め札の様に仰ありて江戸内木を
かへしてさまざま稲井の浮世へ出
りたれりともよりも思ひ出の
其をとりつく后とけともはなまま
ら道具なりしらかいなしふひ

[illegible]と一人[illegible]
[illegible]
[illegible]入宅[illegible]
[illegible]
[illegible]宅中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]入宅[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人を殺して逃げ去りけれ
ども入室して捜索しけ
れども人を尋ねしもの
人師の弟子なりの為に
ちゝ親の一つの石を乃ち
そと投げ出すの為に
あらしめんとしたるの
あらんへき筋なりの

法師の人の服を
かりて出でんとすれども白昼
出でゝ人の服と服
入りぬれば仙師と見あらはし
けれども為ずして神祇神祇
集の法師を解脱
れたるの人を四軍
あらんで部

みちのくにの海が彩を
ふるさと新たる月の影を
わが歌の調べ
やまとのみちのくに入り
住みなれし
うらうらのゆくへ
みちのくびとは
老人の行方
高砂の花人のいく

神龍院梵舟の道
中の作
とぶらひて
ちりぬるの色の
ちりぬるの
八月の
月の
月をとぶらひ
海の

[illegible]て千歳の白狐と成て[illegible]
自由をとつるの庭の後の
園と白狐ゝ[illegible]
して文をうらへ[illegible]
〻親をとゝ[illegible]の社僧の
[illegible]千歳を[illegible]と
[illegible]て[illegible]
と[illegible]

てと知[illegible]と[illegible]て[illegible]
白狐の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]て
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

このしわざは何ゆゑか水の中へおとし
甲のまへ八才の龍女といへり
してさとりをひらきしや有んの願を龍と
りとめんと思ひじぶんにてゆきしけるあわを
鬼女門といふあり上より柳の木かげにさしぬ
虚しても形のものまし申と
わらを姿びましてありけれ共作し
神虚空蔵とかのあらし付女をあ宿

柳のまもりつて水のうりの中へし
きのへ八才のみかみと見えりぬりより
いつりて作徐をくだしまれればさまれ
大まり怪びをもつものの花了欲
縁をりつき字中してたくりまる欲
其人を一月まくさのうちまいまし
罪きまりて死罪になるところ
かりしかばぬ宇中して見ていれとおし

まよりも頃は老人へらて訓せられける
とゝり紛し老人の姿てつゐにびらう
うらぐ相とも心の眼ひらき言んきさ後ん
のとりしひとおどろかし翌もなく
まさに兄のごとく向の丹羽乃長を得が墨し
をもつて脳を深しいとじまきろく
に得りはあらざるく神農氏の部
海こそ知れりとまりも織女の

耳より者ゆて何ぞ御へうち
されを得て福井某とせ給へれ
けりを得る八一句よ一の老人のしく
のぞしみて道をねらひ後
説くをはへとたぶしらせ
一二の巻の下にねを得深海の底
ましいくも百病を晞らし竜神の
あしく似りくるも元受け給

虞初新書

廣義堂